

<文化とアイデンティティ>を主テーマとする日本事情

大嶋 眞紀

1 はじめに

地方国立大学（法人）の学部に入學してくる留学生は様々な問題を抱えている。日本語能力試験の一・二級合格レベルでは大学の通常の講義に即応するのは困難な場合がある。地方都市での新たな生活、アルバイト探し、友だち作りなど異文化適応の問題もある。さらには年齢的にも二十歳前後という成長期特有の試行錯誤、アイデンティティ形成の問題もある。こうした問題を一挙にクリアすることはもちろんできないが、学部留学生の置かれた状況を踏まえ、彼らが一日も早く留學生活を軌道に載せることができるように、思索と学習を促す領域として「日本事情」という科目があるのではないかと考えている。

「日本事情」のカバーする領域としては、日本社会の諸相、日本人の思考やコミュニケーション・スタイル、異文化理解など多様な領域が論考され、またテキストにも採用されている。「社会」を扱うべきなのか、「文化」なのか、ステレオタイプの是非からたどる社会の集団性と非集団性、日本語教育との関わり、文化リテラシーの獲得など、重要な項目が目白押しで、「日本事情」の担当者としては迷いが深い。

しかしながら、「日本事情」の研究領域を教育活動に反映し、なおかつそれが留学生の益になるという方法があるなら、試してみたいと考えてきた。本稿では、大学に入學してきたばかりの学部留学生を主な対象とする「日本事情」の授業で最近試みたテーマ設定型の「日本事情」を紹介したい。「文化とアイデンティティ」という古くからあるテーマだが、これを「日本事情」に応用するとどうなるか模索した次第である。

2 背景と目標設定

2-1 どのような学生が受講するか。

受講した学生は、学部生、短期留学生、日研究生などで、中国・韓国を中心にマレーシア、ドイツからの留学生が混じり、文系クラス 11 名、理系クラス 24 名であった。（平成 16 年度前期）授業は各クラスとも週一コマ（90 分）、一学期 15 週開講された。同じ学生を対象に後期も続きの「日本事情」が開講される。

2-2 学生は「日本事情」に何を期待しているか。

多くの学生が「日本事情」の授業でも日本語が上達することを第一に期待している。自己紹介などでもそのような発言が多く、またニーズ調査などでも、日本語が上達すればすべての問題は解決できるという姿勢が目立つ。しかし実態は日本語能力が高度であっても留學生活に失敗するケースもあり、留学生の期待やニーズに応えるだけでは不十分であると考えられる。

2-3 「日本事情」の目標設定

学習者のニーズに応えるという姿勢はこれまでの大学教育ではあまり重視されなかったと思われるが、日本語教育では学習者重視の姿勢が顕著だ。その点は高く評価されようが、「日本事情」に関しては、より積極的な内容提示も必要ではないかと考える。本授業で設定した目標は以下の通り。

アイデンティティについて問題意識を持たせる。

アイデンティティに関わる様々な領域を認識させる。

それぞれの領域に関する基礎的文献を読んだり、調べたりすることを学ぶ。各種の心理テストや学習活動、自己分析などを経験する。

その結果として、自分の考えをまとめ、自己発信することを学ぶ。

3 授業内容と方法

3-1 各週の進行経過

主テーマ	文化とアイデンティティ	
週	サブテーマに基づく自作教材	添付読解素材
1~3	Unit 1: アイデンティティとは何か	村田孝次「同一性の形成」(『教養の心理学』培風館 pp.37-38)・神谷美恵子「アイデンティティの問題」より(『心の旅』みすず書房 pp.92-94)
4~5	Unit 2: 自己確認	森 瑤子「みんな天才」(『非常識の美学』マガジン・ハウス)・幼児期の幸福度チェックリスト(『新自分さがしの心理学』ナカニシヤ出版 pp.118-119)
6~8	Unit 3: モラトリアム	小此木啓吾「モラトリアム人間の誕生」より(『モラトリアム人間の時代』中公文庫 pp.17-20)・河合隼雄「道草によってこそ道の味がわかる」より(『こころの処方箋』新潮社 pp.164-167)・自我同一性測定尺度(『新自分さがしの心理学』ナカニシヤ出版 pp.44-47)
9~11	Unit 4: 集団とアイデンティティ	ある日本人学生の作文「サークルと私」・大岡 信「車座社会に生きる日本人」より(『国際交流』53, 国際交流基金 pp.22-24)
12~14	Unit 5: 職業とアイデンティティ	村上 龍「目次」「はじめに」より(『13歳のハローワーク』幻冬舎 pp.1-2)
15	Unit 6: アイデンティティの再確認	なかにし礼「セイジオザワ 最後の巨匠」(『道化師の楽屋』新潮社 pp.219-221)・テレビ録画「サイトウ記念オーケストラ in 松本」

3-2 授業方法

3-2-1 講義

サブテーマごとに、導入の講義を行う。例えば「Unit 1 アイデンティティとは何か」では、はじめにアイデンティティという言葉について、日本語では

何というか、適切な訳語がなかなかみつからないのはなぜか、他にもそういう言葉があるか、などという質問を投げかけながら、アイデンティティに興味を持たせるためのごく短い、10分程度の講義を行う。講義の概要については自作教材上にも簡単に示す。また、自習課題として、アイデンティティの定義を調べてくることを課している。

3-2-2 読解

アイデンティティについてまとめた心理学の入門書の精読を行う。16行程度の短文だが、学習者の日本語能力のばらつきを把握し、足並みをそろえさせるために理解度を授業で確かめる。アイデンティティの把握、自己形成の途上での価値基準の取捨選択、アイデンティティを統合させることについて、単純な社会と複雑な社会でのアイデンティティ形成の困難度の差などを十分に理解させるために、口頭で確認すると同時に設問も用意し、回答を書かせる。この部分は次週の小テストとすることもある。最低でも30分程度を要する。

3-2-3 自己確認作業

次に自分のアイデンティティ形成をふりかえる作業を行う。子供の頃の家の決まりや地域の約束事、学校に入学してからの仲間集団の価値基準、理想とするモデルの変遷、価値基準の対立などについて、自分の経験をふりかえる自己確認の作業を単独で行い、ペアで確認、グループで発表する。プライバシーへの配慮が必要。40分程度を要する。一コマ90分の授業がこの辺で終わる。

3-2-4 その他の方法

翌週には、前週の読解素材についての語彙と内容に関する15分程度の小テストを行う。前週からの調べものの宿題がある時は口頭報告、新たな読解、人物紹介、文献探しの課題指定などを行う。Unit 1以外では、項目に答えながら作成する作文課題、読解文の各節へのタイトル付与作業、集団との違和感調査と集計分析、職業の文化比較（職業の種類、決め方など）、各種心理テスト、ビデオ視聴など、単調になりがちな読解作業を有効につないでいく学習活動を可能な限り、取り込んでいる。しかしながら基本的な手法は語学的アプローチとインターアクション、及び知識補充の混在型である。（注1）

なお、読解素材は長くてもA4で1頁（1600字）前後としているが、総読解量はかなり多く、15週の授業ですべてを隅々までカバーすることは困難で、毎回、小テストを課して言葉と内容の理解の確認と定着を行ったものの、語学力の低い学習者に十分対応しきれたとは言いがたい。しかし学習者が家でも繰り返し読む気になれる素材を厳選することの必要性は大いに強調したい。（注2）

4 結果と考察

4-1 学期はじめの様子

アンケートなどはとっていないため、主観的な記述となるが、当初、学生は日本語力強化への期待があるため、内容重視の授業運営に不満げな顔を見せる者も数名いた。しかし、2~3週目、森 瑤子の「みんな天才」というエッセイを読んだところから、学習者は内容に興味を示すようになり、次第に真剣味を増

していった。

4-2 学期修了時の様子

期末レポートに認められた学習効果は数量的なものではないが、質的には学期はじめの問題意識とは明らかに異なり、アイデンティティについて自覚的になったことがうかがわれた。以下例示する。

最終課題中の小問として、学期はじめの自分と学期修了時の自分を比べ、どのように変わったかについて記述するよう指示した。回答の概略は以下の通り。

- ・ モラトリアムが社会全体と関わっていることに気づいた。
- ・ 一番難しい科目。自分のことを考えるようになった。絶対必要なこと。
- ・ 自分の思春期がウソみたいに簡単に説明できるようになった。自分が異常でないことがわかった。
- ・ アイデンティティを確立できないのがふつうだとわかった。
- ・ 授業が自分のことばかりだと思うぐらい、同感できるものがたくさんあった。
- ・ さらなる悩みに落ち込むようになった。でもいつか自分をそのまま認め、自分を素直に受けとめることができるはずと信じている。
- ・ そのときは気づかなかったけど、バレーをやったことが自分の人生を変えたのかもしれないと思うようになった。ずっと「いい子」をしてきた。
- ・ 今までさんざん考えてきたことなので、あまり変わりはなかった。
- ・ 不思議な体験だった。自分についてもっと知りたいと思うようになった。
- ・ 適当なモラトリアムが必要だと思った。

最終課題中の最大の設問は、「文化とアイデンティティ」についてサブタイトルを決め、レポートを作成することであった。以下、提出されたレポートのサブタイトルを列記する。

「鹿兒島のアイデンティティと鹿兒島のトラウマ」、「在日コリアンのアイデンティティ」、「私が知らない世界と知っていく世界」、「帰属」、「マナーとアイデンティティ」、「二つの文化をもつ私」、「自我と他者の関係」、「大学生の不安とアイデンティティについて」、「薩摩芋とカゴシマジン」など。いずれも、外的世界の諸問題と自己の内面を関連させて丁寧に論じた内容で、期末レポートとしての水準は低からぬものがあつた。

4-3 学生の授業評価・教材評価

総じて肯定的で、「日本」と自分の様々な側面について、改めて考えるようになったというものが多い。また教材についても、教材ごとに評価をさせたが、五段階評価で4以上をマークしたものが大半で、中でも読みやすいエッセイは好評で、「勇気をくれた」「6があれば6としたい」「自分を変えた」など今後の読書体験にもつながるようなコメントが見られた。

4-4 考察

日本事情という授業として適切であるかどうかという観点から考察してみたい。まず、学習者が根強く抱いている日本語能力の向上という点であるが、学期修了前と学期修了時の日本語能力の測定を行っていないため、客観的なデータはないが、本授業について単位取得に失敗した者はいない。また他の科目で

単位を大幅に落としたという実態もなく、進路変更、休学が各一名あった以外は順調に大学生生活を継続しているという事実から、日本語能力の獲得という点でも大過なく過ごしていると判断している。

異文化適応という点では、学部生の大半が異文化環境の中で自分の居場所を確保し、アルバイトなどで苦労しながらも、着実に学士号取得という目標に向かって印象を受けている。本授業が異文化環境下での自己理解、自己形成に焦点を定めているため、留学生は外部との調整ばかりでなく、自己の内面との調整ということにも目がいくようになったということが、最終レポートからもうかがわれ、その点は成果があったと考えている。しかし一名ではあるが、学部留学生が休学をしたという事実もあり、この授業だけで学習者の異文化適応の問題をすべてクリアできたとは言いがたい。また日本社会の多様な側面についての認識はまだ道半ばである。

5 おわりに

アイデンティティというテーマを設定して「日本事情」の授業を組み立てることの意義は少なくないというのが実践からの結論である。異文化環境下で、成長途上にある留学生が可能な限り明確に、また多角的に「アイデンティティ」を把握し、その結果を、限られた日本語能力で自己発信し、外界と自己の関係について考察を深めるという手法を紹介したが、今後は後期分と合わせて、この手法を精査するとともに、理論的にも「日本事情」のあり方について調査と考察を進めていきたいと考えている。(注3)

注

- 1) 心理テストの使用については、厳密な取捨選択を行っておらず、使用による否定的影響も考慮する必要があるが、授業の中では自分自身をふりかえるためであること、また使用言語が被験者の内面を巧みに問う傾向などに注目させ、プライバシーに配慮しつつ使用した。
- 2) 読解素材については、過去数年間、学生に好評だったエッセイを中心とした。是非はあるが、日本語を読む楽しさを知ることも必要で、それ以降の学生の日本語体験にも大きな影響を及ぼすと思われる。
- 3) 後期のサブテーマとしては、「時代とアイデンティティ」、「表現とアイデンティティ」、「反アイデンティティ論」、「伝統とアイデンティティ」、「故郷喪失」、「統合に向けて」などを設定している。

参考文献

- 川上郁雄 (2002)「言語と文化の教育そして日本事情」『21世紀の日本事情』第4号, pp.126-132.
 佐々木倫子 (2002)「日本語教育と「文化」概念」『21世紀の日本事情』第4号, pp.146-155.
 細川英雄 (2003)「「個の文化」再論：日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『21世紀の日本事情』第5号, pp.36-51.
 Nagata, Yuriko (1998)「The Study of Culture in Japanese」『Australian Review of Applied Linguistics』No.15, pp.93-104.

(留学生センター教授)

